

昔の子どものくらし—学校と日常—

開催期間 令和元年11月23日(土)～令和2年2月11日(火)

子どもと学校

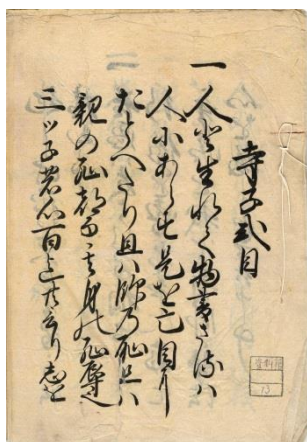
江戸期の教育

江戸期の教育機関には、庶民の子どもが読み書きを学ぶ「寺子屋」、漢学・国学・洋学を学ぶ「私塾」、武家の子どもが儒教などを学ぶ「藩校」などがあつた。庄内の藩校には、松山藩校の里仁館、庄内藩校の致道館(鶴岡市)があつた。

寺子屋では僧侶や武士などが先生になった。年齢の違う子どもたちが一緒に座り、個別に文字の読み書きやそろばんを教わつた。

山形県では寺子屋という名称ではなく、手習所(てならいじよ、てならいどころ)や指南所と呼ばれるのが一般的だった。酒田市では福王寺、覚寿院、五大院、高明院、雲照院などで寺子屋が開かれ、少なくとも69の寺子屋があつたことが確認されている。福王寺に残されている安政3年(1856)の「寺子名前帳」によれば、近所の8歳から14歳までの子どもが4～5年くらい在学していたことが分かっている。

寺子式目



一、人と生まれて物書きは
人にあらず、是を盲目に
たとへたり且は師の恥且は
親の恥都(すべ)て其身の恥辱は
三ツ子の心百迄共言り志を
起し、此恥を不忘手習可被
精出事

寺子屋の規則などを箇条書きにしたもの。
読み書きができないこと(=文盲^{もんもつ})が人間と
して恥ずかしいことを強調する文から始ま
っている。

明治の学校の展開

明治5年(1872)8月、日本初の近代学校制度である学制が公布されると、酒田でも多くの小学校が設立された。学制では6歳になった男女を小学校に通わせることが定められたが、学制に掲げられた理想と当時の庶民の現実とではかなりの隔たりがあつたため、必ずしも規定通りには行われなかった。

これ以降、1つの教室で同じ年齢の子どもたちが学ぶ「一斉教授」が行われるようになった。教科の1つになった唱歌では、「蛍」(のちの「蛍の光」)や「蝶々」など、外国の歌に詞を付け

て歌った。生徒たちは年2回の試験を受け、優秀な成績を修めると書籍や昇級免状が与えられた。学費には、平均1カ月1戸あたり25銭を支払った。

近代的な学校が始まった明治時代は制度が目まぐるしく変わり、その後小学校令や中学校令が公布され、改正を繰り返しながら制度が整えられていった。明治25年(1892)の飽海郡の就学率は男子が約79%、女子が約20%と特に女子が少なかったが、明治33年(1900)の改正小学校令により4年間の就学が義務づけられると、だんだん就学する子どもが増え、明治40年(1907)には男女とも100%近くの子どものみが学校に通うようになった。

酒田の近代的学校 がくじかん 学而館と琢成学校



学制公布前の明治2年(1869)6月、天正寺に学而館が開校した。学而館は儒学による人間形成を目的とする学校で、学生は町人などから有志約80人が集まった。酒田民政局長官(のちに酒田県大参事)の西岡周碩しゅうせきが設立準備を行い優秀な教師や職員が集められた。西岡が免職になり酒田を去ると入学を希望する人が減り、翌年10月には県より「学校規則二付、当分止メラレ候事」という簡単な通達があり、わずか1年5カ月で廃校になった。

その後、廃校を遺憾に思った元職員たちが中心になって資金募集を行い、集まった資金14,000円を県に献上すると、このことが実を結び、明治12年(1879)、市内にあった小学校9校を合併し本町七丁目(現酒田消防署)に琢成学校が開校した。当時山形県内では最大規模の学校で、文明開化を感じさせる洋風3階建ての建物は人々を驚かせた。酒田の文筆家・佐藤良次や鶴岡出身の文豪・高山樗牛ちよぎゅうもこの学校で学んだ。

酒田のさまざまな学校の母体になっており、浜田小学校、光ヶ丘小学校、酒田西高校、酒田中央高校、酒田商業高校などはこの学校から独立した学校を前身としている。

写真は明治15年(1882)に撮影された琢成学校。



石盤

ノートが普及していなかったこの時代の子どもは、ノートの代わりに石盤を使って勉強した。小さな黒板のようなもので、何度も消して書くことができる。文字は「石筆」という石のペンで書いた。

掛図「博物図 第二図」(レプリカ)

明治6年(1873) 文部省発行・長谷川竹葉画



学制による一斉教授が始まると、全員が同じ教科書を使わなければならなくなったが、国が編集した教科書がすべての子どもに行き渡るには時間がかかった。それまでの間、教科書の代わりに「掛図」が使われた。

この掛図は10図からなる「博物図」の第2図。桃・梅・柿といった果実類や、かぼちゃ、茄子、瓜等がカラーで描かれている。

酒田第一尋常小学校(現在の浜田小学校)と子どもたち

明治34年(1901)

明治17年(1884)、琢成学校の第一分校として設立し、明治34年(1901)に酒田第一尋常小学校と改称した。校舎は妙法寺(戸野町)畑地に建てられた。明治42年(1909)の生徒数は、男子543人、女子558人と多く、飽海郡で2番目に規模の大きい学校だった。現在この学校は浜田小学校になっている。



大正の教育

大正期に入ると、ヨーロッパやアメリカで始まった新教育運動にならって、日本でも子どもの興味や関心を大事にして、より自由な教育を目指す運動が起こった。大正デモクラシー(※)も追い風となり運動は全国に広がった。

当時の教科は修身(道徳)・国語・算術(算数)・日本歴史・地理・理科・図画・唱歌(音楽)・体操。ほかに女子は裁縫、地域によっては手工(工作)を加えることもできた。

※大正デモクラシー…「政治には多くの人の意見を生かすべき」という民主主義の考え方や運動のこと。

琢成尋常高等小学校の運動会

大正12年(1923)5月

子どもはみんな着物を着ており、コースは縄で出来ている。



琢成尋常高等小学校の海浜林間学校

大正14年(1925)8月

大正時代、全国各地の小学校などで林間学校や海浜学校が行われるようになった。

琢成尋常高等小学校では、大正14年から身体の弱い児童を対象に海浜林間学校を始めた。光ヶ丘松林内にテントを建て、10日間の日程で、摩擦、唱歌、水浴、日光浴、砂糖湯給与、さんぽ、午睡、童話などのスケジュールをこなした。学校で出された反省点には「海岸の1時間は短いようだが虚弱児童にはこれでも強すぎる事があるので初めは短く馴れるに従って長くしてある」「味噌汁は偏食矯正も考えいろいろなものを煮て全部食わせるようにするが成績がよかった」などが挙げられている。昭和10年(1935)頃まで毎年行われた。



琢成尋常高等小学校の卒業記念写真

大正15年(1926)



洋服は警察官や校長先生などの特別な人や、お金持ちの家庭の子どもが着る衣服だったが、大正末から昭和初期にかけて子どもたちに学生服が普及すると、大衆的な衣服として定着していった。現在と同じように一般の小学校に指定の制服は無かったが、男子はみんな学生服を着て学校に行くようになった。女子の洋服は男子ほど統一的ではなかったが、セーラー服を着る子どもが多かった。

『琢成百年』(酒田市立琢成小学校発行)によれば、琢成小学校では大正9年(1920)の卒業式で洋服を着た男子が最初だったという。大正15年(1926)の琢成尋常高等小学校の尋常科甲組の卒業記念写真を見ると、学制服を来た男子が7人いるが、袴姿の子どもの方が多い。戦後にはほとんど全員の男女が洋服を着るようになった。

酒田の幼児教育

酒田の幼児教育は、明治36年(1903)、青木マサによって設立された青木幼稚遊戯園から始まった。青木は20数名の園児をあつめ、出町に3年保育の遊戯園を作り、翌年第二尋常小学校の校舎の一部を借りてここに移った。明治43年(1910)に閉園し、この跡地に私立酒田幼稚園が開園した。明治44年(1911)、山形県内の幼稚園数はこの園を入れて3園しか無く、他の地域に先駆けての開園だった。

大正期になると全国的に幼稚園数が増加し、山形県内では、大正14年(1925)までに15園になった。園児数も明治44年は251名だったが、大正14年には1,045名まで増えた。



慈光日曜学園

大正期

慈光日曜学園は大正9年(1920)、浄福寺に創立し、生徒数は120名を超えた。折り紙や遊戯の授業が行われた。



酒田幼稚園 園外保育のようす

昭和16年(1941)

戦争と子どもたち

昭和6年(1931)の満州事変以降、日本は戦争へと突き進み、教育体制も大きく変化した。昭和16年(1941)に「国民学校令」が公布されると、明治以来広く親しまれた小学校が廃止され「国民学校」になった。教育内容には当時の社会情勢が反映され、国家主義的で軍事色の強いものになっていった。また教師に対しても、指導内容について厳しく統制された。

昭和19年(1944)、東京をはじめ全国の軍事主要都市などから地方への学童疎開が始まった。

酒田市へは東京都の砂町国民学校の児童が割り当てられ、237人が集団疎開してきた。家族と離れて疎開してきた子どもたちは、酒田駅前の佐々木、矢口、安藤、工藤の各旅館と、市内の竹八、熊本屋、草分の各旅館を宿舎とし、酒田第一国民学校と第三国民学校(現在の浜田小学校)で授業を受けた。

旧校名	国民学校名
琢成尋常高等小学校	酒田市第一国民学校
琢成第二尋常小学校	酒田市第二国民学校
琢成第一尋常小学校	酒田市第三国民学校
亀ヶ崎尋常高等小学校	酒田市第四国民学校
西平田尋常高等小学校	酒田市第五国民学校
酒井新田尋常高等小学校	酒田市第六国民学校

戦後の教育

昭和20年(1945)8月15日に太平洋戦争が終結すると、日本へ進駐した占領軍により、教育に関してさまざまな指令や要求が出された。教科書の軍国主義的な内容や極端に国家主義的な内容は削除するよう指示され、学校や家庭ではその部分の内容を墨で塗り潰した。

当時、酒田第三国民学校(現在の浜田小学校)の5年生だった成田恒夫氏は『浜田百年』(酒田市立浜田小学校発行)の中で、「学校での最初の仕事は、進駐軍の命令とかで教科書の墨塗りが続いた。一字一句まちがいなく塗りつぶすということは大変なものであった」と語っている。

昭和22年(1947)に「学校教育法」と「教育基本法」が制定されると、すべての子どもが平等に教育を受ける権利が保障された。中学校が義務教育化し、義務教育期間が9年間になった。学校の名前も国民学校初等科から小学校に改められ、高等科は廃止された。小学校の教科は、国語・算数・音楽・図画・工作・体育になり、社会・家庭・自由研究が新たに登場した。



光ヶ丘小学校の給食風景

昭和30年前後

戦後の学校給食は昭和22年(1947)、アメリカからの脱脂粉乳の配給や、アジア救済委員会の援助などによって始まった。昭和24年(1949)に酒田市内の小学3年生以上の保護者を対象に実施した世論調査では、70%の人が「よろこんでいる」と回答した。

昭和51年(1976)からごはん給食(米飯給食)が正式に導入され、その後各学校に普及していった。



家庭科の授業

昭和30年前後



音楽の授業

昭和期

昭和30年頃の浜中の子どもたち

当時浜中小学校の教員だった方が、学校風景や子どもたちの写真を多数撮影しています。写真に写る日常のようすや子どもたちの自然な表情は教員だからこそ撮影できた当時の貴重な資料です。



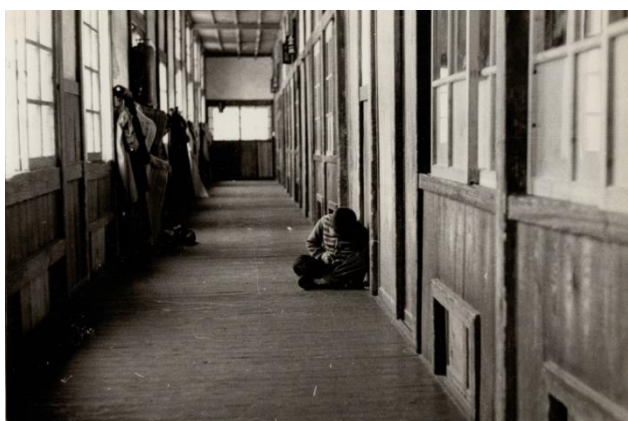
鉄棒で遊ぶ男の子たち

昭和32年（1957）



そろばんの授業

昭和30年頃（1955）



廊下に出された男の子

昭和30年頃（1955）

授業中に叱られると、廊下に出されたり立たされたりすることもあった。この男の子は退屈してビー玉で遊び始めている。



赤子を背負って勉強する子ども

昭和30年頃（1955）

特に農繁期は子守をしながら学校に通う子どももいた。

遊びと日常

遊びの移り変わり

テレビやテレビゲームが登場するまでの子どもたちは時代に関係なく外で遊ぶのが常だったが、時代によって新しい遊び道具が登場し、子どもの遊び方にも時代の流行があった。

明治頃には西洋からガラスやブリキなどの素材も入ってきて、さまざまなおもちゃも作られるようになった。明治27年頃(1894)は、日露戦争の影響で、戦争ごっこや戦争玩具も流行した。

大正時代になると、さまざまな素材のおもちゃが外国から入ってくるようになり、特にセルロイド製のキューピー人形は人気があった。大正7年(1918)にやわらかくて安全なゴム製の野球ボールが作られると少年野球が盛んになった。

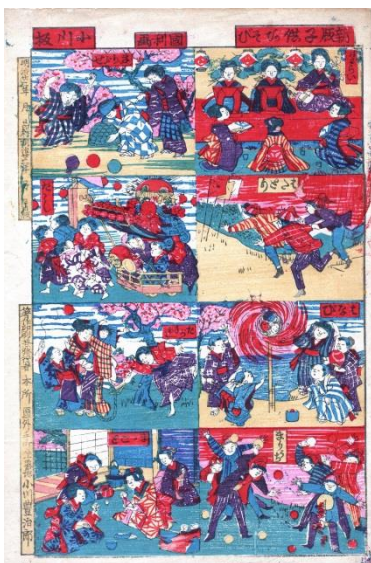
戦後になっても遊び方はそれまでと変わらず、外でチャンバラごっこや、鬼ごっこ、ゴムとびをして遊ぶ子どもが多かった。



すみだかわつづみはなざかりこどもあそびのす
浮世絵『隅田川堤花盛子供遊之図』

江戸期 歌川貞虎・画

歌川貞虎は文政から天保年間に製作した江戸の浮世絵師。この浮世絵は、3枚1組だったと思われる。



おもちゃ絵『新版 子供あそび』

明治期 歌川国利・画

「おもちゃ絵」は、絵すごろくやカルタとともに、近世後期から近代にかけて製作・出版された知育玩具で、子どもたちが遊びながら日常生活に必要な知識などを習得するものだった。



古水戸で魚とり

大正頃

古水戸は、通称しじみけ川(蜷川)と呼ばれ、光ヶ丘松林のわきにあった。着物姿の少年たちが「がちゃくり網」と呼ばれる網で魚取りをしている。



船場町付近で水遊び

年代不明

年代は特定できないが戦前の絵葉書を引き伸ばしたものの。船が並ぶ船場町の船着場で少年たちが楽しそうに泳いでいる。



**新井田川河口で子ども釣り大会
(現袖岡埠頭岸壁)**

昭和28年(1953)



新井田川で釣り

昭和40年(1965)



新井田橋(めがね橋)の近くで舟遊び

明治末～大正頃



幸福川で釣りをする少年

昭和48年(1973)



大浜海水浴場
大正～昭和初期



水着姿の少女
昭和後期



雨の中の見物者たち
昭和30年(1955)



お兄ちゃんにおんぶ
昭和29年(1954)



地べたで寝る子ども
昭和30年(1955)頃

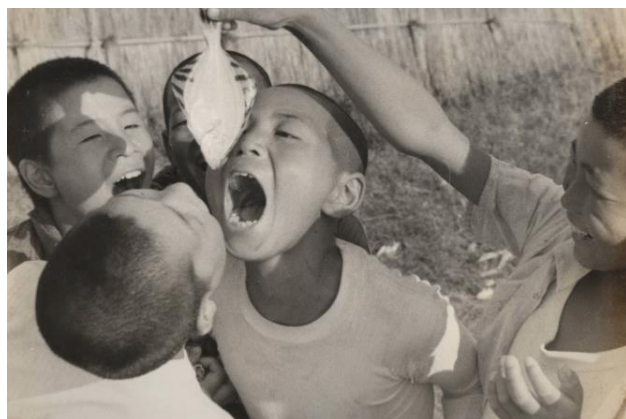


兄妹
昭和29年(1954)



雪合戦

昭和32年(1957)



浜中の子ども

昭和32年(1957)



道路にて

昭和32年(1957)



風車で遊ぶ女の子たち

昭和41年(1966)



ままごと遊びをする女の子たち

昭和後期



犬と遊ぶ男の子たち

昭和期



ソリ遊び
大正期



スキー遊び
昭和40年(1965)前後



駄菓子屋と子どもたち
昭和30年代

市内の駄菓子屋と思われる。
駄菓子屋は戦後になって爆発的に増えた。お小遣いで買える安いお菓子が並び、店先は子どもたちでいっぱいになった。



清水屋の屋上遊園地
昭和40年(1965)前後

昭和36年(1961)に完成した清水屋のビル(現在のパイレーツビル)の屋上にあった遊園地。



飴細工
昭和後期



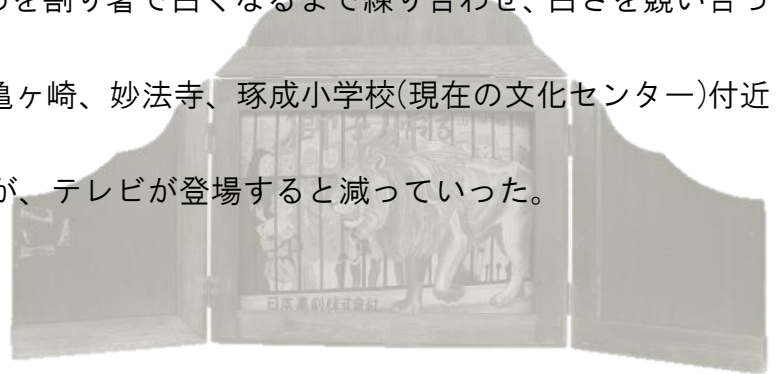
公園で遊ぶ子どもたち
昭和40年(1965)頃
新井田川沿いの公園と思われる。

紙芝居屋さん

自転車の荷台に紙芝居の台をつけた紙芝居屋のおじさんが来て、拍子木を鳴らして触れ歩くと、子どもたちは遊びを中断して集まった。水あめ(かよあめ)などを買って食べながら見ていた。すぐに食べ終わるとつまらないので、水あめを割り箸で白くなるまで練り合わせ、白さを競い合っ

て遊んだ。
酒田では柳小路、日和山、八雲神社、亀ヶ崎、妙法寺、琢成小学校(現在の文化センター)付近など各地で行われていた。

昭和27年(1952)頃までは盛んだったが、テレビが登場すると減っていった。



新堀の田んぼで堆肥運び

昭和40年(1965)頃

子どもたちはただ遊んでばかりではなく、農作業の手伝いや、家畜の世話、子守など家の手伝いもした。

昭和50年代

下の写真は昭和50年、51年のもの。男の子も女の子もデニムを着用し、子どものファッションも多様化していることが分かる。

右の写真は日和山公園で開催されたヨーヨーコンテスト。当時ヨーヨーが大ブームになり、子どもたちは赤いブレザーを着た外国のヨーヨーチャンピオンの技に目を奪われた。

